

グローバル教育における生徒の内発的動機付けに関する研究

－本校とSGH指定校との取り組みから概観されるもの－

森 永 武 人 神戸学院大学附属高等学校

1. はじめに

現在、「グローバル教育」については数多くの学校で様々な取り組みが実践されはじめ、学校の特色作りの中心的な位置づけになりつつある。また、昨年度からスーパーグローバルハイスクール(以下、SGH)として文部科学省から112校がその指定を受けることにより、国全体の取り組みとしても「グローバル教育」はこれからの学校教育を考える上において重要な役割を果たすものと考えている。また、SGHにおける取り組みの多くが「グローバルリーダー」の育成に焦点を置いたものであったり、同時に各教科指導の枠組みを超えた連携した取り組みになってはいるものの、SGHの取り組みに関わらず、「グローバル教育」に関する取り組み自体がそれぞれの教科にどの様に影響しているのかについて広く横断的に言及されていない実情がある。このような状況を踏まえ、今回の研究では、学校教育における「グローバル教育」のあり方が、日常的な学習活動における「内発的動機付け」にどの様に関わっているのかについて、本校での取り組みと合わせ、現在SGHに指定されている学校等に対して「聞き取り調査」及び「アンケート調査」を用い、その「内的変化」について学術的に論証することにある。同様に、「グローバル教育」そのものが普段、学校で展開されている学習活動に対して補完的な役割を果たしていることを確認することにより、教科指導とは違った側面から学習に対する明確な動機付けになっていることを学術的に論証したいと考えている。この研究を通じ、今後さらに多くの学校で展開されるであろう「グローバル教育」のひとつの指標になることが出来ればと考えている。

2. 調査および取り組みの概要

調査は主に本校生徒を対象にしているものと、SGHに指定されている学校を対象としている。具体的には、本校の学校全体で取り組んでいるA『グローバル・ゼミ』、「総合的な学習の時間」にて実践しているB『グローバル・キャリア』、希望参加で行ったC『セブ島スタディツアー』および、昨年度からSGHに指定を受けている学校に対するD『アンケート調査および聞き取り調査』によって行った。A『グローバル・ゼミ』は本校全体の講演会を中心とした取り組みのひとつで、本格的な展開は来年度からの予定であり、今年度一部先行的に実施しており、4月には元サッカー日本代表 F C岐阜監督のラモス瑠偉氏に講演をして頂いた。また、10月には神戸学院大学法学部教授の杉木明子氏より講演『子ども兵士』をして頂いた。B『グローバル・キャリア』は総合学習の取り組みのひとつで、個人の将来のキャリア形成のあり方について、生徒個人の「性格分析」や「外国人との異文化交流」、また夏休みには、「職業体験(インターンシップ・プログラム)」や家族に対する「職業アンケート」また、「神戸マラソンボランティア」へ参加したり、企業訪問として「東京三菱UFJ銀行」神戸支店へ訪問し、実際に社会で働いている方々からお話を伺った。とりわけ、日常の授業展開において力点を置いている点としては、講義形式だけではなく、出来る限りグループワーク(以下、GW)や発表を伴ったアクティブラーニング(以下、AL)を

積極的に取り入れた。また、プレゼンテーションスキルの集大成として、『ビブリオバトル(知的書評合戦)』にむけた取り組みを行なっている。C『セブ島スタディツアー』1週間の「語学研修」と、現地の子どもたちとの「ボランティア活動」を行うことを目的とした取り組み。SGH指定校に対するD『アンケート調査および聞き取り調査』。

3. 結果

A『グローバル・ゼミ』に参加した生徒からのアンケートから「僕は本当にこの国に生まれてきて幸せだと思いました。今自分がすべきことを一生懸命行って、少しでも将来その子供達のために役に立つ人になりたいと思った。」「今も戦場で戦っている人のためにも、勉強して世界のために頑張りたい。」

B『グローバル・キャリア』では、様々な取り組みを行い、その都度アンケートを取ることで、内的変化を追跡した。その中でも生徒たちの振り返りでは、生徒個人に対して行った「性格分析」や「外国人との交流活動」、「ビブリオバトル」が印象に残っていたり、特に「インターンシップ・プログラム」や「神戸マラソンボランティア」のような体験的な活動が「内発的動機付け」と相関が高いことが分かった。

C『セブ島スタディツアー』では、研修前と後の英語(英検準2級、2級)についての正解率(平均)が49.9%から56.5%となったこと、意識調査では「全体を通じて」および「これから学校生活(勉強も含め)を頑張っていこうと思いますか」という問いに対して、いずれも100%という結果であった。

D『アンケート調査および聞き取り調査』(SGH指定校)

Q1『貴校のSGHの取り組みの中で、特にどの様な活動が日常的な学習活動に対しての内発的動機付け(意欲的なもの)に繋がっていると感じになりますか?』(記述)

- ・調査・探求・発表・討論・レポートという形での研究することにより自己肯定感を持つようになった。英語ディスカッションの経験を通じて英語の4技能習得への意欲に繋がっている。
- ・ブレインストーミングやKJ法などの活動を取り入れている。その結果、他学年とは明らかに学習に対する取り組みが違う。自分達で進んで取り組む姿勢が学習活動に見られる。
- ・SGH指定後の入学生は明らかにグローバルな課題への意識や取り組み意欲が高い。
- ・ALを強く意識した活動を通じて学びへの意欲をはじめ、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢や根拠に基づいた意見発表を行う姿が見られるようになった。
- ・学校全体が向かっている方向性が明確になった。
- ・世界で活躍する著名人や研究者の話を聞くことで、学習に対する関心・意欲が高まっている。(ロールモデル)、大学への憧れ
- ・生徒が外で飛び出し交流する機会を創れたことは少なからず生徒たちのモチベーションを高めることに繋がっている気がします。それに伴い、通常の学習への意欲が高まっているということも見受けられます。
- ・数々の講演、PBLを通じての生徒たちの反応、意欲の高揚が感じられます。
- ・課題研究とそのプレゼンを英語で進めていること。
- ・動機付けにならないといけないし、そうなるようにしなければならないと思います。
- ・主体的に問題解決に当たる点などが内発的動機付けに繋がっていると感じる。
- ・実際に留学生とのワークショップを体験させることにより、一層英語学習に対する意欲が高まっていく効果が感じられる。

- ・「多くの人と話をする・話を聞く」「発表する」ということが生徒の活動意欲を高めていると感じます。具体的には、フィールドワークとプレゼンテーションです。
- ・ジグソー学習やALの導入により、総合学習だけでなく、教科面においても生徒が主体的に取り組むようになった。
- ・生徒自身が「なぜ学び、何を学ぶのか」を考える場面が発生する。これを考えることが、学びの動機付けになると思われる。
- ・批判的(ロジカル)な思考力が身につけている点、教科の授業内でプレゼンテーションに積極的に取り組んでいる点、具体的な社会とのつながり、具体的には英語や現代社会において顕著。

Q2『先ほどの質問以外の点において、生徒の変化等あれば御自由にお書きください』

- ・模擬裁判選手権、模擬国連大会、短期留学、サマーセミナーなどに積極的に生徒が参加。
- ・SGH以降、理数系クラスから英語コース(SGH)に成績優秀者が移行。
- ・グループ学習を行うことで、クラス内の集団としての雰囲気が良くなった。プレゼンテーションに対する抵抗感がなくなった。英語特に、リスニング・スピーキングに対する意識の高まり。
- ・積極的に意見を言えるようになった生徒が明らかに増加していますし、国際化への視野の広がり、多様性理解も進んでいるようです。
- ・「研究」へのイメージが易化し、取り組みやすくなった。いい意味での競争心が研究の質の向上をめざす態度につながった。
- ・グループ討論など協同的作業に対する苦手意識がなくなった、プレゼンテーション能力に向上が見られる。論理的思考、判断力の高まり
- ・実際に活躍している大学生(留学生)や社会人からの刺激により、学校生活全般や学習に前向きに挑戦するようになってきている。学びの方向性が少しずつ見えてきていることとともに、良いロールモデルに触れる機会となっている。
- ・主体的に学ぶ生徒が増えてきた。英検を受ける生徒が増えた。
- ・「自分でも社会貢献できることはないか」と社会貢献活動に目を向ける生徒の増加。

Q3『SGHの取り組みの中で、在籍している生徒以外で学校全体や先生方、もしくは生徒募集に対して何らかの変化はありましたか』

- ・生徒募集について中学生・保護者の参加者が大幅に増加。外部からの来校者が増え学校に活気が生まれた。
- ・学校全体...保護者を含めた地域の期待がこれまで以上に大きくなり、地域創生・活性化に向けた連携が深まった。教員...課題研究の指導に積極的な教員が増えた。
- ・海外からの問い合わせ(主に現地日本人学校に通う日本人から)が増加した。
- ・教科連携・科目間連携を实践する授業が増え、それを意識する教員が増えた。
- ・担当教員は様々な研修、SGH校の視察の機会があり、ルーブリックを用いた評価法の話をはじめ、最近の教育をめぐる制度改革について学べる機会が増えた。
- ・行事などの運営を生徒に任せる。校外での研修プログラム(留学舎)に申し込む生徒が増えた。
- ・AL導入と相まって課題解決学習やPBLの考え方が教員に広く共有され、大きく変化した。
- ・教員には負担は増しているものの指導力の向上にはつながっていると思う。
- ・学校全体が「グローバル教育」の必要性を認識。教員の意識も総じて向上。
- ・学校改革に資する効果があると思われます。

・本校が掲げている教育理念がさらに強く確認することができたと思います。

D『アンケート調査』(SGH指定校)「SGHに関わる取り組み自体が、日常的な学習活動に対して内発的な動機付け(意欲的なもの)に繋がっていると感じになられますか?」という選択制の問に対して、「感じる」「やや感じる」合わせ、全体の95%の学校において肯定的な結果になっている。一方で、「SGH指定後、校務が多忙化しましたか」という質問に対して、ほとんどの学校において多忙化したとの回答が寄せられていた。総合的に、世界で活躍する著名人や研究者との触れ合いや校外での活動や他校生徒の交流などと同時に、学内においても課題研究等に対して、AL・PBL・ジグゾー学習などの取り組みが意識的に行われている学校において顕著に日常的な学習に対する取り組み姿勢の向上が見られた。一方、学校や教員の変化として『学校としての方向性が明確化』していることや『教員の意識や指導力の向上』に確実に繋がっていることが伺える。

4. 考察とまとめ

『体験活動』を通じた生徒の主体的な活動における『自己肯定感』の向上や、社会的背景の異なる人たちとの『交流活動』においても大きな意識の変化をもたらすこと。同時に、ALやPBLなどといった授業展開を並行することにより、日常的な学習にも大きな変化をもたらしていることが確認された。したがって、この様な取り組みが生徒の内発的な動機付けに対して有効であるのと同時に、論理的思考力や判断力が醸成することが明らかになった。この様に、生徒一人ひとりが主体的になり、自分の意見を明確に発信することの出来る力が育成されていることは今後の大学入試制度改革で議論されていることと大きく連動していくものであると考えている。同時に、この様な意識の変化が生徒一人ひとりの「キャリア形成」とどの様に関連してゆくのか、継続して検証する必要がある。そして最後に、今回の研究を行うにあたりご協力いただいた多くのSGH指定校の先生方に対して感謝申し上げます。